

〔研究論文〕

縄文時代集落考 (Ⅵ)

後 藤 和 民

第2節 考古学における縄文集落の把握

はじめに

かえりみると、1877年にE.S.モースが東京都大森貝塚を発見し(註1)、わが国に縄文時代という石器時代が存在し、その縄文人の生活の痕跡が現存することがはじめて知られるようになってから実に120年、1905年にM.G.マンローによって横浜市三沢貝塚が発掘(註2)されて、縄文集落の群在が認識されてからすでに80年、そして少なくとも、1930年に八幡一郎らの東京大学人類学教室が市川市姥山貝塚を集落遺跡として組織的・計画的に発掘調査(註3)してからも半世紀以上を経ている。その間、日本列島の各地においておびただしい数の縄文遺跡が発見され、竪穴住居址などの遺構を中心として集落の研究が着々と積み重ねられてきた。

だが、この縄文集落の研究における動向にも、いろいろな屈折や変遷があり、またそれを学史的に捉えるにもさまざまな観点や目的の相違がある。たとえば、藤森栄一による家屋構造や住居址展開の把握から一集落の復原、集落の形態や構造の研究へという段階的な捉え方(註4)や、小林達雄による「個別の遺跡を対象とする研究」と「複数遺跡の関係を対象とする方法」という集落研究のアプローチの仕方による把握(註5)、それに林謙作による「集落」と「領域」の概念と、村落・領域論の展開の過程を捉えたもの(註6)などがある。そして最近では、長崎元広による多角的・総合的な把握によるすぐれた研究史(註7)が発表されている。

しかし、これまでの集落研究においても、その研究史の記述においても、ごく一部のものを除くと、もっぱらその研究の対象や方法に主眼をおいたものが多い。もともと研究の対象とか方法というものは、研究者の観点や目的によってこそ規定されるべきものである。元来、その観点や目的を見究めようとする根本的な態度がいささか欠落していた憾がある。そこで、従来の主要な研究のなかから、観点や目的意識の明確なものを取りあげ、その志向性を概括してみるならば、およそ次のような3つの動向に捉えることができるので、それにもとづいて、ここにごく概観的な研究史をまとめてみようと思う。

1. 人文景観としての集落研究
2. 社会組織としての集落研究
3. 文化基盤としての集落研究

1. 人文景観としての集落研究

1923年、柴田常恵が富山県朝日貝塚においてはじめて縄文時代の竪穴住居址を発見（註8）してから、1924年の後藤守一による東京都高ヶ坂遺跡における敷石住居址群の発掘（註9）、1926年の東京大学人類学教室による市川市姥山貝塚における竪穴住居址群の発掘（註3）など、大正末期には各地で住居址の発見があい次いだ。

このことが、従来の遺物中心主義から遺構認識への発展をもたらしたとはいえ、所詮それは竪穴の形態、柱穴の数や深さ、上屋の構造など、おもに住居構造の復元を目的とした建築史的な観点にとどまっていた。その端的なあらわれとして、関野克による家屋構造の復元、住居の改築、居住人口の算出法などの考察（註10）がある。そのほか、この種の研究のなかでも以後の研究に大きな影響を与えたものをいくつか取上げておかねばならない。

1 後藤守一：「上古時代の住居」（1940）（註11）

1924年の朝日貝塚における発見以来、全国各地における縄文時代住居址の発掘が続々と報せられ、「かくて昭和年代は、古代住居研究の活躍著しいもの」があったという。そのような全国における発見例をここにはじめて集大成し、竪穴住居址をはじめ、敷石住居址、平地住居址、集石遺構、ストーンサークル、洞穴住居址に至るまで、あらゆる集落遺構の分類とその考察を試みているのである。

それにもかかわらず、結局「一住居群の総合的発掘調査は、未だ一回も試みられたこともなく、為めに古代聚落の形態研究は、その一步をも踏み出してゐないといつてよい」と嘆かざるを得なかった。だから後藤守一は、「いままでの発掘・調査が不充分であり、集落全地域の発掘、しかもその当時のジャスト・モメントにあった家のあとが明らかにされない限り、縄文時代のムラを明らかにすることはできない」（註12）ことを、たびたび主張していたのである。

しかし、その基本的な観点や研究の目的は、あくまでも「当時のムラの景観を復現すること」にあり、「ジャスト・モメントに、或る地域にどんな姿でムラが散っていたか」、「また一つのムラを棄てて他へ走った人々は、どのくらい離れたところに、新しいムラをつくったか」などを明らかにすることにあった。ただし、みずからが手掛けた東京都西秋留遺跡については、それをほぼ全域を発掘したものとして、「中期のムラは五、六戸」、「一戸に自然家族で五、六人、ムラ全体でも、小さい一部族^{ツラツ}ということになる」と推定している。

かつて、明治初期から大正末期にかけての「人類学」的研究においては、遺物や遺構などの表面的・断片的な表象から当時の集落構造や社会組織を、いきなりモルガンの『古代社会』

（註13）などの民族学的概念にあてはめて解釈しようとする傾向があった。これに対して、後藤守一はあくまでも考古学的な研究方法に基づき、具体的な考古資料の蓄積によって実証的に解明しようという態度がありありと示されている点で、ここに注目すべきであろう。

2 三森定男：「先史時代の聚落」（1940）（註14）

これは、先にあげた後藤守一の論文とほぼ同時に発表されたものであるが、やや観点を異にしている。三森も後藤と同じように、まず「聚落の構成要素を一々解明させて行くためには、少くとも遺跡全面に亘る発掘調査が最も望まれる」が、従来の研究は「聚落位置や大体の形」を捉えたにすぎないという。そこで、「聚落形態の構成要素」として、便宜的に次のような分類をおこない、それによって具体的な縄文集落を捉えようとしている。

A 外的なもの……聚落の位置とその占める範囲

B 内的なもの……① 住居の形態

② 住居間の距離

③ 住居の排列

④ 住居の位置

⑤ 交通路

⑥ 居住地区・生産地区および祭祀地区などとの関係

} = 集落の景観復元

なお、一般に未開社会においては、その集落に特定な狩猟場や漁場や採集地などの生産地区が決められ、それが集落間のテリトリ（Territory：領域）として厳格に守られており、かなり離れた地区をもつ場合もある。しかしそのような様相は、遺跡や遺物などの考古資料だけで実証することは到底むりなので、「遺跡の前後に広がる空間をその活動地表と考えるより他はない」という。すなわち、従来の考古学的把握のなかには、その実証性を強調するあまり、とにかく遺物や遺構の分布範囲だけという狭隘な観点があったが、当時の人間集団の生活や生産などの文化活動の実際によって、その生活基盤としての集落の実体を捉えようとしている。しかもその集落の立地やその周辺地形や空間的ひろがりをも含めて集落範囲を捉えようとしている点において、きわめて重要な問題を含んでいるのである。

3 宮坂英式：『尖石』（1957）（註15）

先にあげた後藤守一や三森定男の影響によって、とくに東京大学の八幡一郎の直接指導もあって、1929年以来単身で長野県尖石遺跡を掘りつづけてきた宮坂英式は、ついに「住居址群の総合的発掘調査」を実現した。そして1946年の中間報告（註16）のなかで、尖石集落は「南北の住居地区と其間に介在する社会地区の三地区から構成され」ており、しかもその周辺環境として、「生活物資が豊富に供給される地区が従属されるべきである」と述べている。

さらに宮坂英式は、新たに発掘した与助尾根遺跡の住居址群について、住居や炉の形態や埋甕や祭壇状石組などをもとに3つの群に分け、また炉縁石の有無によって住居の移動を推定しながら、集落の構成とその推移について論考している（註15）。そして1957年に、ついにわが国で最初の集落遺跡の本格的な発掘調査報告書として、『尖石』を発表するに至り、一躍学界の注目を浴びることとなった。

一部において、この報告書をもって「着実に集落を復元した最初の画期的研究であって、日本における原始集落研究の原点」（註7）とする見方もあるが、現在の観点から評価するならば、逆にこれを集落研究の「原点」としてきたところに、大きな誤謬があり研究の停滞している原因がある。むしろ、これが戦前における集落研究の集約的な帰着点であり、一つの限界でもあった。その基本的な観点や目的意識においては、当時は人文地理学のなかから歴史地理学や集落地理学が抬頭してきた時期でもあり、その影響を受けたためか、人文地理学の観点から一步も出ていない。すなわち、集落というものをある限定された一地点における人為的な景観として捉え、その表面的な形態や構造などを恣意的に論じてきたにすぎないからである。しかも、実際的には尖石遺跡にしても与助尾根遺跡においても、その集落としての全貌を捉えるべき全面発掘は完了しておらず、これまでに発見された竪穴住居址群の周辺にも、同一台地上に未発掘区域が展開しており、なお数多くの集落遺構が埋没している可能性が残されているのである。

4 水野正好：「縄文式文化期における集落構造と宗教構造」（1963）（註17）

この宮坂英式の観点や研究成果を踏襲しながら、水野正好はさまざまな文化人類学的概念を導入して与助尾根遺跡の分析と整理を推し進め、ここにみごとな観念的模式図をつくりあげた。まず、宮坂が試みたように住居址の重複や炉縁石の有無によって、この集落のジャスト・モメントを前期と後期の2時期に分けた。そして、とくに後期の集落展開について、特殊遺物や特殊遺構のあり方によって東西の2大群に分割し、それぞれを2棟ずつの小群に分析して、それらは集落（部族）—大群（家族）—小群（小家族）という構成であったと推定した。しかも、土偶、石棒、石柱祭壇などは、それぞれ集落内の各種の祭式を示すものであるとし、それらの分布状態から、各小群がそれぞれの祭式を分掌したものとして、次のような祭式構造と集落構成の図式を提示している。

第一類 広場祭式（集落に祭祀基盤をおくもの）

第二類 葬送祭式（集落と大群間に基盤をおくもの）

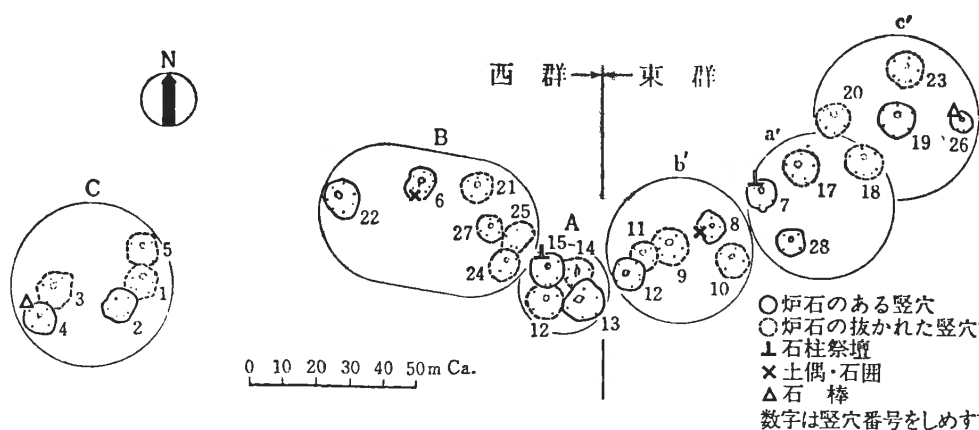
第三類 （大群と小群間に祭祀基盤をおくもの）

(1) 石柱祭式……狩猟神・祖家神（男性祭式）

(2) 土偶祭式……穀神・母神（女性祭式）

(3) 石棒祭式……性神・成育神（男性祭式）

この試論については、すでにさまざまな批判もあるが、従来の住居址群の集合のみを対象とし、その平面的な形態や構造を捉えようとする単純な観点に対して、きわめて立体的で多元的で漸新な構想として、当時の考古学界を瞠目させたことは否めない事実である。以来、この水野の観念的な図式にあやかって、同じような集落構造の分析を試みるのが各地で流行した。しかしこれは、集落の表面的な形態や構造からいきなり文化人類学的な成果に牽強附会して解釈を試みただけのもので、その必然性や実証性に欠け、結局は集落景観の復元に終わっている。



第1図 長野県与助尾根遺跡における集落の展開（水野正好による）

こうした学界におけるさまざまな批判や指摘を受けた水野は、一転して「縄文時代集落復元への基礎的操作」（1969）（註18）というきわめて原則的な方法論に立ちもどって、さまざまな試論を展開している。ここにも、相変わらず集落研究に対する基本的な観点や目的意識は提示されていないが、その表題（傍点は筆者）や内容のなかには、おのずからそれが表明されている。まず、「住まいとしての住居」では、住居址内の生活空間としての細かい間取りを論じ、「住まいのうごき」では、重複住居址を中心にして住居の建て直しと建て替えとその移り変りに触れ、「村の歴史」では、当時の集落には本村と分村とが存在したと推論し、その村のテリトリーにまで言及しているのである。

以上のように、集落にかかわる種々の条件を取りあげ、その一つ一つについていささか独断的な類推的解釈を加えながら、きわめて重要な問題を提起している。それにもかかわらず、その目的は所詮、集落景観の復元に終っている。しかも、その集落景観が復元されてはじめて、それが「歴史学の対象となる」と信じているのである。だから、そのためにはあらゆる既成概念や文化人類学的な成果というものを手段的に援用したり借用した憾がある。これはとんでもない誤謬であり、本末顛倒もはなはだしいことである。むしろ、集落景観の復元といっても、その集落の実体を捉えるための基本的な観点こそ問題なのである。その観点によっては、最終的に描かれる集落の景観などは、実はどのような様相にも変化してしまうからである。

したがって、これら水野のユニークな研究も、残念ながら基本的な歴史的観点の欠如のために、この「人文景観としての集落研究」の段階に位置づけざるをえないのである。

Ⅱ 社会組織としての集落研究

いかなる集落研究においても、もともとその集落の構成主体である人間集団の存在を前提としないものはないはずである。しかし、その人間集団の捉え方そのものが問題なのであって、その基本的な観点によって大きく違ってくるのである。従来の把握がつねに的確であったとは限らないし、またその多くは根拠がきわめて稀薄であった。ここでは、主として集落の主体者を把握することを目的とした代表的な研究を取りあげてみたい。

1 瀬津正志：「原始日本の経済と社会」(1935) (註19)

瀬津はまず従来の考古学研究が、「特殊遺物の年代考定、様式、製作技術、装飾の研究、或は美術的鑑賞(珍物主義)」、「文化」などにのみ重点を置いて、遺物遺跡が示す当該時代の生産力並びに生産諸関係、従って社会組織の考察を全くないがしろにしてゐる傾き」があったことを指摘する。当時考古学の領域でも、「社会」という言葉が用いられるようになったが、その意味する内容はただか「集団」というにすぎない。しかし、それが「どんな組立を持った社会であるかが問題で」、「その時代の生産諸関係及び社会組織」を再現することこそ考古学の「中枢の任務であり」、「かくして考古学も亦、経済学又は社会学の範疇に属する一つの学問となる」と論じている。

たとえば「石器時代の生産」として、狩猟、漁撈、採集を挙げ、とくに「貝塚の存在は同時に聚落の存在を意味し、又その大小によって、居住期間の長短が推定され得る」といっている。また、クジラ、オキギス、コチ、ウナギなどの沖魚や深海魚が獲られ大きな網や船の存在から、「大規模な協業の存在」が推定され、貝塚における短期間に多量の貝を採集しているのは、江見水蔭の「むきみ屋」説(註20)のとおり、「他部落へ供給されたことを物語る」ものとして、「交換が偶然の機会から発生し始めることを示してゐる」という。これは、貝塚の表面的な様相に対する恣意的な解釈などですまされることなく、当時の社会組織と密接にかかわるきわめて重要な問題提起であり、従来の常識を破る漸新な提言であった。

そこで「石器時代の社会」として、当時の住居様式や共同墓地的な埋葬形態、そのほか各住居址や埋葬に伴う物資に大差がなく、「それらが石器時代民衆の財産を形成してをり、奢侈富貴品の如きは全くこれを見ない点」に注目し、「各住居は平等であり、これに住む人々の富の程度も凡そ平等であり、従って、未だ十分に個人的又は家族的富の蓄積が行はれなかったことを示す」という。そして共同墓地の副葬品や葬法などから、「すべて平等に葬られた階級分化の未だ行はれていない状態を示してゐる」ことを論じた。

これは、生産の協業や物資の共有などによって、私有財産や階級制度の発生以前の社会として捉えたもので、L.H.モルガンやマルクス＝エンゲルスなどの唯物史観に基づく発展段階説の影響を強く受けているが、集落を一つの社会組織としてみていることは明らかである。

2 和島誠一：「原始聚落の構成」(1948) (註21)

和島誠一は瀨津正志と同様な観点から、その後の長野県尖石遺跡の発掘成果や和島自身の千葉県下における研究成果などをもとに、その理論を実証的に発展させた。戦後間もない思想統制の解かれた時期だけに、しかも理論と実際が結びついた研究発表だっただけに、これは当時の考古学界に一つの新鮮な風潮を吹きこんだ記念すべき論文である。

このなかで和島は、「先ず住居跡とその成員が如何なる性格の聚落に属し、またその聚落の構成部分として如何なる機能を果たすかを、具体的に、従って歴史的に追求する必要がある」ことを提唱した。そして具体的に、各地の遺跡においてみられる「長期に亘って、聚落の規制と位置が踏襲された」形跡は定住性を示し、その中央広場は集落の結集の場であるとした。

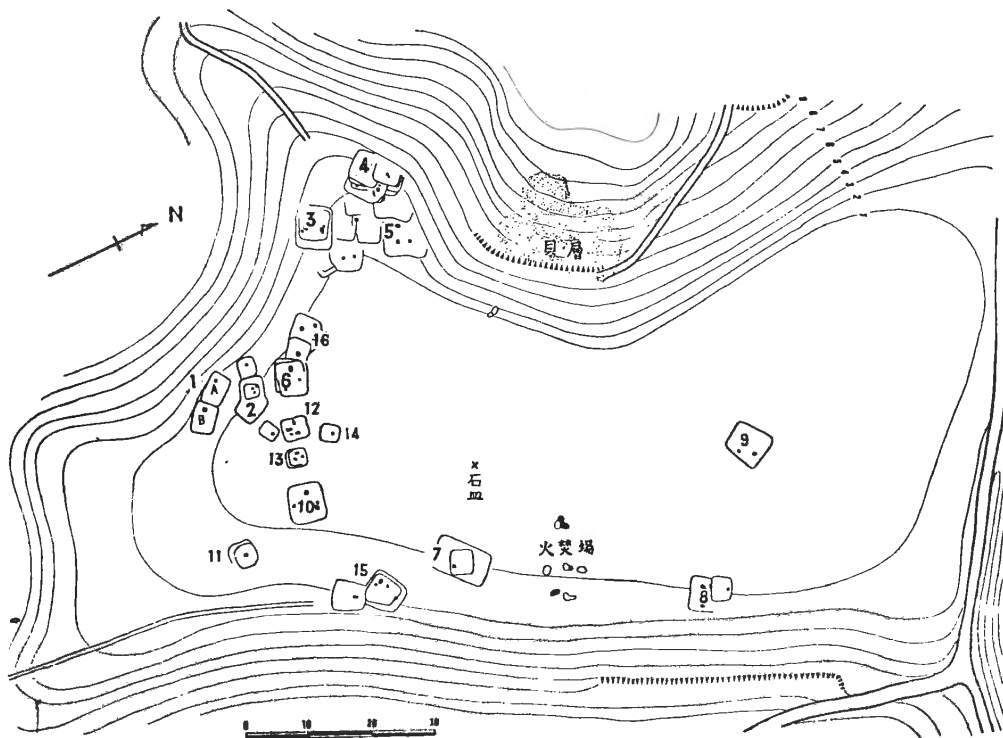
また、縄文時代のような採集経済段階では、「単純協業と性別及び年令等による初現的な分業」や、「濫獲を防ぐような統制力」が必要で、当時の「聚落は強固な統一体として機能せざるを得ない」から、それぞれの成員は「生産の面では、聚落全体の組織的な動きに強く抑制される一部分として、初めて意味を持つ」という。そして、住居の均一性や共同墓地から、当時の社会にはまだ階級分化はなく、氏族共同体的な関係があるとし、とくに女性土偶の存在から当時は「母系制氏族社会」であったと想定したのである。

この「試論」をもとに、数年後の1955年になって和島は岡本勇・麻生優らとともに横浜市南堀貝塚のはば全域を発掘調査し、その理論の実証的成果を加えた(註22)。すなわち、一つの舌状台地上に展開する住居址群の配置、出入口の方向、大型の焚火址と石皿を伴う中央の共同広場、西側斜面の共同ゴミ捨場としての貝塚、湧水点や舟着場の位置などによって、縄文前期の集落構造を立体的に復元した。そしてこの南堀集落においては、「おそらく、一堅穴の成員は、ひとつの血縁集団のなかでの『自然家族』を単位とするものと思われ」、「集団は全体として強固な統一体をなしていた」と推論している(第2図)。

3 麻生 優：「縄文時代後期の集落」(1960) (註23)

この和島理論の影響を強く受け、それを継承し発展させたのが麻生優と岡本勇であった。とくに麻生は、市川市堀之内貝塚・曾谷貝塚および浜松市蜷塚貝塚などの馬蹄形貝塚に共通する考古学的事実から、そこには自然条件や地域性を超越して、「伝統的な慣習にねざす共同体規制」という「社会組織のしくみから必然的にもたらされた結果としての馬蹄形集落が存在する」ことを主張した。これは、当時の学会に大きな影響を与え定説化していったのである。

社会組織については、季節的な集落の変化として、「大規模な根拠地的集落遺跡」と「野営的な性格の小さな遺跡」との強い結びつきや、同じ場所に埋葬がくり返される「共同墓地」の存在などを指摘し、それらが当時の社会組織から帰納された共同体規制に強く結びついたという。そして、「このような集落の研究は、共同体研究のうちの基礎的な操作として重要な意義を担うものである」ことを強調している。



第2図 横浜市南堀貝塚における集落の展開（『横浜市史』第1巻）

第1表 南堀貝塚出土の竪穴住居址一覧（『横浜市史』第1巻）

番号	大きさ(縦・横)	周囲	間隔	方向	周溝	形状	時期
1A	4.5×5.0	17.50	1	NW	無	長方形	K
1B	4.5×5.0	17.80	1	NW	有	長方形	K
2A	5.0×3.7	16.80	1	NNW	無	長方形	—
2B	2.5×2.3	8.80	—	NNE	有	長方形	K
2C	3.4×?	12.40以上	4	N	有	—	K
2D	4.0×?	13.60	—	N	無	—	—
2E	2.4×3.0	10.90	1	W	無	長方形	K
3A	7.3×8.4	24.00	—	NW	有	長方形	K
3B	6.0×6.0	18.60	6	NNE	有	台形?	M
4A	—	—	2	—	無	不整	K
4B	—	—	—	—	有	—	—
4C	—	—	—	—	無	—	—
4D	—	—	—	—	有	—	—
4E	5.2×?	—	—	—	—	—	—
4F	6.4×?	26.00	2	NE?	有	方形	M
4G	—	—	—	—	有	—	—
4H	—	—	—	—	—	—	—
4I	4.2×?	14.80以上	2	NE	有	隅丸方形	M
4J	5.2×5.0	19.60	2	NE	有	方形	M
4K	—	—	—	—	有	—	—
4L	—	—	—	—	—	—	—
4M	—	—	—	—	—	—	—
4N	—	—	—	—	—	—	—
4O	—	—	—	—	—	—	—

番号	大きさ(縦・横)	周囲	間隔	方向	周溝	形状	時期
4P	—	—	—	—	—	—	—
4Q	—	—	—	—	—	—	—
4R	—	—	—	—	—	—	—
5	6.4×?	—	4	NE?	有	—	—
6A	5.2×4.1	16.80	—	W	有	長方形	M
6B	5.0×4.4	18.40	3	NW	有	方形?	M
7A	4.5×4.2	16.60	—	N	有	方形	K
7B	9.5×5.7	29.20	1	NNE	有	長方形	K
8A	6.0×5.0	20.40	4	WWN	無	方形	M
8B	4.0×4.0	12.80	1	WWN	無	方形	M
9	6.5×5.3	22.50	2	NE	有	台形	M
10	6.2×6.0	23.20	9	N	有	方形	M
11A	3.2×3.6	12.80	—	W	無	隅丸方形	M
11B	4.0×3.6	15.20	2	W	無	隅丸方形	M
12A	4.4×3.8	16.00	4	N	有	長方形	M
12B	3.0×2.6	10.50	1	NE	有	長方形	M
13A	2.8×2.4	10.00	—	N	有	長方形	K
13B	3.6×3.0	12.60	3	N	有	長方形	K
14	2.6×2.6	9.30	1	NNNE	無	隅丸方形	M
15A	5.4×4.5	18.60	2	NNW	無	長方形	M
15B	4.6×4.4	18.60	—	NW	有	台形	M
15C	6.0×5.2	22.00	4	NW	有	台形	K
16A	5.0×?	約 18.60	2	—	有	不整	K
16B	3.2×3.8	約 14.00	1	—	無	方形	M

・大きさはメートルを単位とする。・2A, 12Bの各住居址は、島田曉氏によって発掘されたものである。方向は竪穴の長軸を示す。
・時期のKは黒浜期をMは諸磯期をあらわす。・この表は仮製であり、報告書において正確を期したい。— 印は不明のものである。

4 塚田 光：「縄文時代の共同体」(1966) (註24)

この共同体の問題に真正面から立ち向かい、そのうちの「家族」を中心に、考古学的な成果にもとづく具体的な実証を試みたものとして、これは注目すべき論文である。まず塚田は、家の機能は「家族の全成員をそこに結集すると同時に、家族相互間の混淆を防ぐ役割を果たす」という。その観点から、竪穴住居址を取り上げ、とくに共同体内の「家族」の有無とその内容について、各時期ごとの様相とその変遷の過程を推論している。

すなわち「一集落内の一竪穴住居の住人が、どのような世代によって構成されていたのか」が重要な問題であるとして、市川市姥山貝塚における「何等カノ事情ノ為、同時ニ横死セリト做ス」べき住居内合葬例などから、「一竪穴住居に住んだ“家族”は1世代または2世代の同居から成る小家族であり、前・中期の一集落はこうした家にもとづく小家族数戸からなる共同体がその基本的な内容であろう」としている。

さらに、社会学における「家」の概念にもとづいて、「家を一つの単位とする家族」を中心に、「家にもとづく共同体を、共同体内の最小の一単位と考え」、「共同体内での人口の増加は、必然的に“家”の増加＝共同体の規模の拡大」となるという論を展開している。しかも、屋内炉を欠いた早期の竪穴住居址は、日常生活において食物の受用などに家族の全成員を結集したり、家族相互間の混淆を防ぐ機能が十分に果せないから、「早期の段階では、家を一つの単位とする家族の成立はみられ」ず、「早期の共同体の特色は、家族を欠除する血縁共同体である」と推論している。

ここにおいて問題となるのは、塚田が規定する「家族」の概念がきわめて偏っており、それがあまり普遍性をもっていない点である。和島誠一が指摘しているように、「一世帯」と「一家族」との混同がみられ、当時の「共同体」の本質を見逃してしまう危険性をはらんでいる。現在の段階では、考古学的な事実にもとづいて「家族」の実体を規定することは、まだ冒険であり危険である。それにあえて挑戦した塚田光の勇気ある向学の志に敬意を表したい。

5 大林太良：「縄文時代の社会組織」(1971) (註25)

これは、従来の考古学的研究の成果を集約して、それをカルフォルニア・インディアンや東北アジア漁撈民および北方ユーラシア狩猟民という3つのモデルと対比しながら、文化人類学の立場から縄文時代の社会組織についての試案を提示したものである。とくに和島誠一・塚田光および水野正好などの諸説を取り上げ、逐一検討を加えながら次のように総括している。

まず和島誠一の主張する「母系氏族説」については、いまのところ「縄文時代に母系制が存在した証拠はないという結論に落ち着いた」。また「環状村落をもつもののうち、父系制をもつものばかりでなく、母系制のものもあるから、縄文時代の馬蹄形村落が母系制をもっていた可能性は絶無とは云えないが、日本との比較により適切な東北アジアの多家族竪穴住居の場合など考えて、あまり可能性があるとは思われない」という。

また、水野正好によって提示された与助尾根遺跡における東群と西群などの「双分組織」については、縄文時代の中・後期における東日本にその存在を思わせる遺跡もあることにはあるが、「双分組織を構成する2群のコントラストのシンボリズムが、与助尾根を除いては、まだ不十分にしか判っていないので、まだ双分組織存在の蓋然性はそれほど高くない」という。しかし、もし双分組織が存在した場合には、一般にそれは父系的な社会が多く、縄文の社会一般に父系的な傾向があることからみても、その可能性がないわけではないというのである。

しかし、このような諸外国における未開民族の風俗を中心とした文化人類学や比較民族学的な研究成果を基準にして、それらの民族とはまったく無関係な縄文時代の社会における考古学的諸現象を、その概念やパターンの枠のなかにむりやり当てはめて、その適合・不適合によって縄文社会を規定しようとするのは、もともと主客顛倒の誤りである。このことが、考古学に対しても文化人類学に対してもいえることを、奇しくもこの論文が証明している。

6 堀越正行：「縄文時代の集落と共同組織」（1972）（註26）

まず、いままでの研究によると、縄文時代の集落の構成は次のように把握されているという。

- ① 血縁的な共同組織をその根幹とすること。
- ② 食料獲得にあたって協業・分業が行われ、ほぼ公平に分配消費する。それは集団・集落維持の鉄則で、集落そのものが一個の生産単位であり消費単位であること。
- ③ 以上のことから、小家族の独立性はなく、潜在的にのみ存在していること。
- ④ その住み分けには性別・年齢別が認められず、ほぼ均等に各世代が住んでいるが、小家族のみとする積極的根拠に乏しいこと。

また、集落の権力者や呪術者の存在については、「集落は一つの集団・まとまりとしてはじめて有効に機能し」、「その集団は生活を共同にする血縁者によるチームである」。そのチームワークの「統制の主体は権力者ではなく、それを構成する全成員である。リーダーは委任された形でその集団の永続性を希求する」にすぎないという。

そして、共同組織の実体としては、千葉市域の都川流域における貝塚と海との関係を取りあげ、その分布や立地と増減の時期的変化を概観して、次のように述べている。すなわち「縄文時代の社会は、個々の単位集団、あるいは定住した状態での個々の集落が自律の主体として存在し、それらが相互に社会関係をもって社会を構成していたと考えられる。生活の主体、意志の主体は、各単位集団であったのである。その単位集団は、原始的平等性によって常に貫かれた、強固な規制の主体であり、統一体である」というのである。

なお、堀越はこのほかに、市川市の姥山貝塚と支谷をへだてた対岸にある今島田遺跡との関係について述べ、両者の遺跡内における貝殻投棄の量の相異などから、漁場の占有関係や漁業権の問題に触れながら、当時の社会規制について論じている（註27）。これについては、あとで詳しく論ずる機会もあるので、ここでは触れないがきわめて重要な課題である。

Ⅲ 文化基盤としての集落研究

以上のような「人文景観としての集落研究」や「社会組織としての集落研究」は、それぞれ集落研究の必然的な発展の段階であり、また集落研究の基礎的な必要条件でもある。だが、それが集落研究の最終的な目的でも、それをもって完結しうるものでもないはずである。しかも「人文景観としての集落研究」は、おもに人文地理学的な観点に基づくものであり、「社会組織としての集落研究」は、主として社会学的な観点に基づくものである。とするならば、歴史科学たる考古学独自の観点から、集落研究はどうあるべきであろうか。

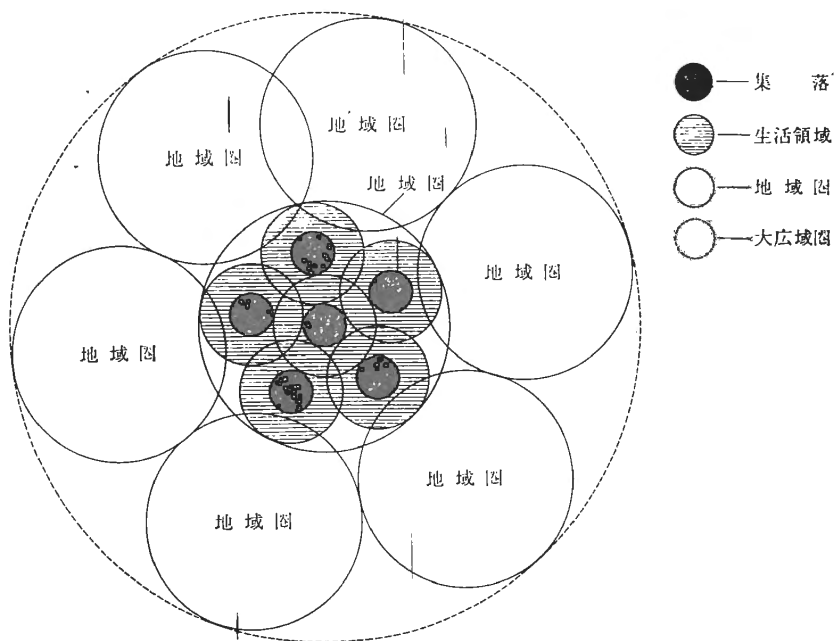
それには、まず集落というものを人間集団が主体となって空間と時間を規定してゆく動的な存在で、しかもその広がりと移り変わりのなかで、その文化そのものを定着してゆく求心的な基盤として捉える必要がある。したがって、考古学における集落研究の目的は、ただ単に集落の景観を復元することでもなければ、一集落の主体者である人間集団の組織形態を捉えるだけでもない。縄文時代の文化の様相やその変遷というものは、その核となり中心となるべき基盤がなければ、具体的に定着できるものではない。そのような文化現象の動態の求心的・集約的な基盤を捉えてこそ、はじめて人間集団と文化活動の本拠地たる集落の歴史的意義がある。

このような観点は、1940年の酒詰仲男による貝塚相互間の交通問題を扱った考察（註28）のなかに、すでにその萌芽がみられる。また1958年の南堀貝塚の発掘報告（註21）においても、「社会的に孤立した集落というものが存在しえない以上、それらの集落は相互に有機的な関連をもっていた」と考えられ、さらに先に挙げた麻生優の論文（註23）でも、「大規模な根拠地的な集落遺跡」と「野営的な性格の小さな遺跡」との関係や季節的な移動や離合集散が予測されている。

1 高橋 護：「縄文時代における集落分布について」（1965）（註29）

岡山県児島半島の北岸に集合する彦崎・舟津原・磯の森・船元などの遺跡群の間には、各個の遺跡に不連続の時期があり、その中断時期は他の遺跡においてみだされるといった相補的な関係が認められる。それは各集団が一定の生活圏を占有しながら、長期にわたって遺跡間で移動をくり返した結果であるとも理解され、それぞれの時期の集落がその周辺に独占的な狩猟・漁撈区域をもっていたという。しかも、「このような相補的な関係で遺跡が把握されることは一つには、その定住性が極めて強固なものであって、少なくとも一型式の間に再三移動を繰返す状態ではおこりえないことである」と論じている。

ここにおいて、遺跡群の有機的な関連を動的に捉える新しい観点と方法が提示され、従来単純に捉えられていた集落の定住性についても、継続的定住と断続的定住とがあり、しかも循環的回帰性の定住の可能性も暗示されているのである。これは、集落というものが、その狩猟や漁撈の生産活動と密接な関係をもち、その必要性によって移動をくり返す可能性をもち、そのような文化活動のベース（基盤）としての機能を有することを提示しているのである。



第3図 領域の概念模式図（向坂鋼二の概念規定により筆者作成）

2 向坂鋼二：「原始時代郷土の生活圏」（1970）（註30）

集落を捉える場合、「当然問題となるのは、その集落の日常における生活領域（テリトリー）である」。領域の問題は、その隣接する集落の領域とも関連するから、単独で集落を捉えても解明できない。現存する遺跡は、集落が移動した軌跡とみられるから、「何らかのまとまりを示す遺跡群として扱われたものは、実は一つの人間集団の移動範囲、したがって、その集団が占有していた領域を示す」ものであるという。

さらに、複数の集落が結合したより大きな共同体が共有する領域を捉えるため、同じ土器型式を伴う集落は何らかの意識の共通性をもつものと解し、その分布圏が集落群の舞台となった一定区域で、これを「地域圏」と呼ぶ。またその複数の地域圏が連繋する領域を「大広域圏」として想定している（第3図）。

このように、一つの集落を捉えるのにも、その集落の活動範囲としての領域だけではなく、その文化活動の総体的な広がりの中、その中心的な基盤となった最小単位的生活圏としての集落を位置づけようとする。これは、その活動の領域そのものが文化活動の軌跡であり、当時の文化そのものである以上、その文化の基盤としての集落を捉えようとするもの以外の何ものでもないのである。高橋護の研究とともにこの向坂の研究によって、ようやく、考古学における集落研究が、考古学独自の観点と研究方法によって考古学的事象を解明しようとする自主的な第一歩を踏み出したともいえ、学史上きわめて重要な意味を持っている。

3 石井 寛：「縄文社会における集団移動と地域組織」(1977) (註31)

さきに高橋護は「一型式の間に再三移動を繰返す状態ではおこりえない」と主張したが、石井はむしろ短期間移動の可能性があったことを提唱した。その移動を示す実例として、従来連続的な「拡張」や「建直し」と考えられていた住居址は、「非居住期間」を挟んだ「断続居住」すなわち集落の移動と「反復構築」が行われたことを示しているという。

しかも、それは同一集落地内での移動ではなく、別の集落地への移転を示しており、それが各時期に普遍的にみられる。したがって、「縄文時代においては一定の土地に対する定着性を強めながらもなお、かなり頻繁に移動が繰返されていた」という。

とくに、「領域が他集団との間に結ばれる諸関係の上に成り立つものであり、移動もその関係の一環をなすものであるならば、第一に一定地域内における集団の占地を考察する必要がある」として、港北ニュータウン地域における集落址の分布状態を検討した。その結果、「移動の範囲、生活単位領域、移動を保証する地域集団」などが想定され、「その移動は決して無秩序で乱雑なものではなく、地域的にいくつかの『集団』が結合関連して行なわれたと考え、そこにある段階の組織さえ想定」できる。すなわち集落の「移動論は縄文時代の社会論であり、集団論なのである」と結んでいる。

これは、高橋護の観点を踏襲しながらも、長期定着説と短期移動説とに矛盾対立しているかにみえる。しかし、それは縄文集落というものをすべて一括して捉え、それを同質・同格に一般的に論じているからで、その集落の捉え方にまだ本質的な問題が残されている。

4 後藤和民：「社会と集落」(1974) (註32)

東京湾沿岸は日本でも最大の貝塚密集地域であり、「縄文時代文化全体のなかの、一つの地域性」を示す貝塚文化圏として捉えられている。だがこの貝塚密集地域においてさえ、同じ東京湾に臨みながら、大型貝塚を伴う集落と小型貝塚を伴う集落と貝塚を伴わない集落がある。このうちの大型貝塚を伴う集落だけが、長期にわたって定住したり、人口が増加したり、文化の中心だったとは到底考えられない。

そこで、貝塚のメッカである千葉県下における貝塚の消長を検討すると、集落が定着的・集中的になる中・後期に大型貝塚が発達し隆盛をきわめるが、霞ヶ浦沿岸地域で製塩が始まると、急激に貝塚が消滅する。この海を媒介とする二つの生産の交代現象から、大型貝塚は単なる日々の食料残滓の「ゴミ捨場」ではなく、保存食料としての「干貝」を共同で生産加工していた作業場であった可能性がある。しかも、硬い石材の乏しい千葉県下の各遺跡から、各地山岳地帯の石材でつくられた石器が多数出土し、同じ県下の遺跡でも、石材を取り寄せて石器を加工している集落と、その製品を取り寄せて消費する集落とが共存している。こうした様相から、集落間の分業と地域間において特有資源や専従的生産物による余剰物資と欠乏物資との物物交換をおこなう相互補完的な社会関係が存在していた可能性を指摘している (註33)。

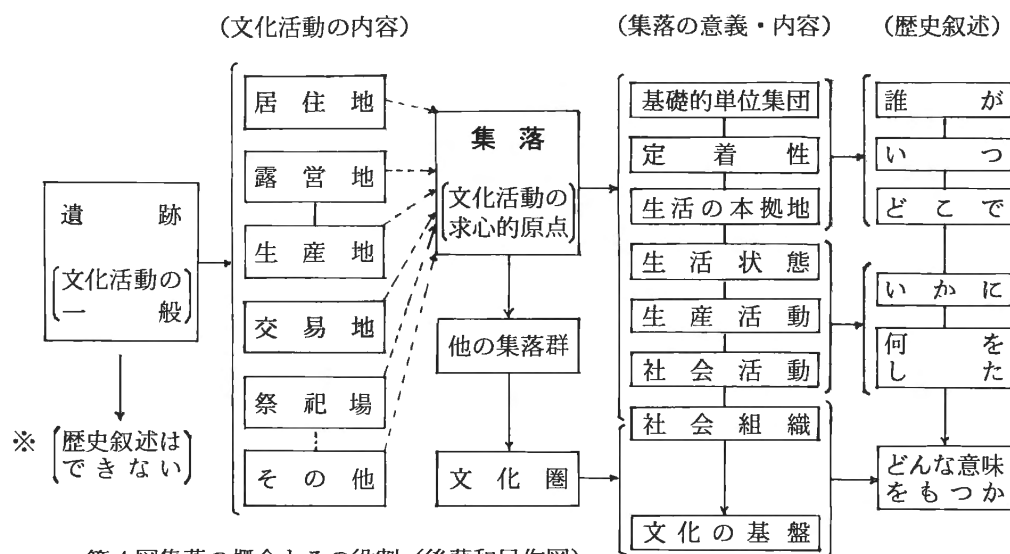
こうした縄文時代における文化現象や歴史事象を叙述するには、いつ、どこで、誰が行なったかという主体者の実体とその占有する領域およびその所属する時期を示すべき拠点がなければならない。それが、叙述すべき文化や歴史の基盤となるべきものであり、筆者はそれを「集落」として捉えるのである。そして、さまざまな文化活動の痕跡である各種の「遺跡」のなかから、その活動の求心的原点となるべき「集落」を選び出すのである。

集落や領域の研究を、「原始共同体」を捉える手段的・便宜的カテゴリーとして用いたところで、その結果得られた抽象的概念によって一体どんな歴史叙述ができるのであろうか。たとえばできたとしても、その歴史の主体者ははたしてどこの誰だというのであろうか。その意味において、筆者は「集落」と「遺跡」とは決して混同してはならないものと考えている。また、そのような「集落」を捉えてこそはじめて考古学は歴史叙述をなしうる歴史科学となると信ずるからである。

5 小林達雄：「縄文時代の集落」（1980）（註5）

まず、「遺構・遺物の総和が遺跡に対する第一次的な認識とすれば、その総和の意味はさらに高次の認識に属するものであって、両者の混同は決して許されない」という。そして前者を遺跡と呼び後者を「セトルメント」としている。しかも遺跡は個別的で一回性を示すが、遺跡の意味を表わすセトルメントには複数の間に共通する性質を類型化することができるとし、その類型化された一群のセトルメントは、「セトルメント・パターン」という、より抽象的な概念として認識されるという。このような観点から、縄文時代の遺跡を概観すると、次のような6つのセトルメント・パターンに分類できるというのである。

- A 台地上の相当広い平坦面に、多数の竪穴住居址や貯蔵穴・墓壙群などを伴い、その中央に広場をもつ。遺物の種類も量も多く、土偶や石棒などの特殊な儀器を含む。土器様式の2～3時期以上にわたる継続的定住地である。
- B 馬の背状の舌状台地先端部に、竪穴住居址数棟～20棟を伴い、貯蔵穴や墓壙などが少ない。中央広場としての平坦部は狭く、遺物は多いが特殊遺物は乏しい。存続期間も土器様式の1時期程度である。
- C 緩斜面やその裾部、丘陵頂上部などの狭い平坦面に1～2棟の住居址を伴うが、遺物は少なく、他の遺構も儀器もほとんど伴わない。
- D 急斜面などにも立地し、住居址がない。他の遺構もほとんどなく、土器は数個体、石器は稀で、炉址や焼土なども確認されない。
- E A～Dから離れて別個に存在し、特定の機能と結びつく遺跡。たとえば墓地、デボ、土器製作用粘土の採掘跡、石器原材の採掘跡、石器製造跡、陥穽群、環状列石などである。
- F その他、遺構・遺物などは具体的には確認できないが、一晚だけのキャンプ地、水呑場、狩猟採集地などと想定されるもの。



第4図集落の概念とその役割 (後藤和民作図)

しかも、一定地域内におけるセトルメント・パターンの総和として「セトルメント・システム」が捉えられるとし、その具体例に約3,000ヘクタールの多摩ニュータウン地域内における512カ所の遺跡を取りあげ、そのセトルメント・システムの分析を試みている。

これは、O.K.チャンやT.C.キリーなどのSettlement Archaeologyの影響により、その観点や方法をそのまま縄文時代の遺跡に当てはめようとしたもので(註34)、その結果は、従来の遺跡そのものの分類と何ら変わるところがなく、所詮遺跡の分類に終りそれ以上の発展的意味はない。とくに6つのパターンのうち、A～Dは「縄文時代におけるセトルメントの根幹をなす」というが、これらと墓地、デボ、陥穽群、キャンプ場など同列・同格に扱ってパターン化するようなセトルメントの概念には、遺跡との「混同は決して許されない」ほどの意味はどこにもない。たとえば、A～Dのパターンは集落の類型を捉えたものとして評価できても、E～Fのパターンをいかなる根拠に基づいて同類化したのか理解に苦しまざるを得ないのである。

しかも、「遺跡の総和」とか「遺跡の意味」によってパターン化するには、その判定の基礎的な観点や根拠が問題となる。それは決して客観的な事実の帰納によっておのずから決まるものではなく、判定者の観点や解釈によって千変万化するからである。したがって、このパターン化やシステム化の目的こそ問題であり、はたしてこの方法が何のためにどのくらい有効なものであるかを吟味しなければならない。

ここでは、人間集団のあらゆる文化活動の痕跡として残された無数の遺跡を「総和」するなかで、さまざまな活動内容の有機的な関連を捉え、また一定領域内における人間集団の占居形態の様相を動的に把握することによって、その中心となるべき居住領域を定着しようとしている。すなわち、結局は当時の文化の中心的基盤を求めているのだが、セトルメントの概念を採用したために、「誰が」の問題が把握できず、失敗に終わっているのである。

小 結

以上のように、集落の概念の捉え方にもいろいろな観点があり、さまざまな変遷があった。それらをまとめてみると、「人文景観としての集落」から「社会組織としての集落」へ、そして単独集落の構造的な分析から集落群の集団領域としての把握へと進展してきた。しかしそれらの把握は、歴史叙述を目的とする考古学独自の立場からみると、必ずしも妥当であり十分であったとはいえなかった。

たとえば、縄文集落の復元をめざして当時の集落景観を正確に捉えるには、かつて後藤守一が指摘したように、集落遺跡の全面発掘によってあらゆる集落遺構の分布状態から、ジャスト・モメントごとの集落全体の様相を再現しなければならない。それを捉えずして、ただ局部的な発掘成果をもとに集落の規模や形態、集落構造や住居内の住み分けなどを論じてみても、それはあまり意味をなさないことはいうまでもないことであろう。

また当然ながら、集落には特定な区域内に特定な期間にわたって占居した特定な人間集団が存在しており、その集団の実体を捉えることこそもっとも基本的な条件である。また、その人間集団がいかなる社会集団であり、いかなる組織によって構成されていたかは、将来において必ずや解明されなければならない本質的な課題である。だが、だからといって、現在の考古学の成果にもとづいていきなり家族や氏族・部族や母系・父系制などを論ずるのはいささか早計である。それを捉えるには、まだ有効な資料や実証の方法が不十分で無理な段階なのである。にもかかわらず、その断片的な現象を民族学や文化人類学で捉えられた類型概念（パターン）に短絡的に当てはめようとする傾向があり、そのような牽強附会の説が意外に多いのである。

たとえば、独自の観点によって考古学研究を進めていった結果、その現象や内容がたまたま文化人類学における類型概念と符合したというのならまだしも、文化人類学的な成果を絶対的な前提として、それに適合する現象のみを抽出するとしたら、それはまさに主客顛倒の誤まりとなる。しかもその結果、類型概念に該当しない要素や現象を遺漏することになり、その文化全体を正当に捉えることはできないのである。またたとえびつたり符合したとしても、それによって縄文時代の文化全体が世界的な他の地域や他の時代における文化と同質・同一のものとはならない。ならば、それは一体いかなる意味をもち、それによって何を叙述するのであろうか。

文化人類学における文化の類型（パターン）説や進化論的な文化の発展段階説によって、縄文時代を人類史や世界史上に位置づけようとするためなら、それもある程度の意義をもつかも知れない。しかし歴史叙述を目的とする考古学においては、集落を総合して類型化する以前に、まず具体的な集落を個別的に定着する必要がある。たとえば類型化されたセトルメント・パターンは歴史叙述上の主体者とはなりえないし、「誰が」という主人公を規定することはできないのである。

しかし日本語の「集落」の概念は、歴史叙述上の主体者となりうるし、現在の考古学においては「誰が」を規定しうる概念や実体としては、この「集落」以外にはありえないのである。一般に、この「集落」と「セトルメント」を混同している向きもあるが、もともと二つの概念は、その目的も観点も全く異なった別個の概念なのである。このことを明確に自覚しないかぎり、集落研究の混乱は今後も、無意味に続くであろう。

また「集落」といっても、それを考古学的に捉える場合、それが包摂する具体的な内容は、当然ながらその集落の所属する時代の文化状態や人間集団の文化活動の実態によってこそ具体的に規定される。すなわち集落の実体は、観点の進展に伴いその研究成果によって、その組織とか構成といった具体的な内容を確保してゆくべきものであって、あらかじめ先験的に規定しうる集落の実体というものは、もともとありえないのである。その意味においても集落研究とは、文化の総合的な研究とならざるをえないであろう（第5図）。

なぜならば、考古学研究の実際においては、たとえば縄文時代の文化を歴史的に叙述しようとするとき、「いつ」、「どこ」、「誰が」という具体的な主体者を捉えるためには、その主体者と関連するあらゆる文化活動の求心的原点を求めざるをえないのであって、それは結局「集落」というものに帰着せざるをえないからである。また、そのような主体者となりうるような「集落」の概念や実体でなければ、考古学的に意義はないはずである。ここに、集落を文化の基盤や求心的原点として捉えることの本質的な意味があるのである。

（千葉市教育委員会文化課）

〔脚 註〕

- (1) E.S.モース；『大森介墟篇』 東京帝国大学 （1879）
- (2) M.G.Munro；“Prehistoric Japan,, .Yokohama;New York,London (1971)
- (3) 八幡 一郎；『下総姥山に於ける石器時代遺跡』 東京帝国大学人類学教室研究報告Ⅳ
（1932）
- (4) 藤森 栄一；「原始古代聚落の考古学的研究について」『歴史教育』14-3 （1966）
- (5) 小林 達雄；「縄文時代の集落」『国史学』110・111号合併号 （1980）
- (6) 林 謙作；「縄文期の集落と領域」『日本の考古学を学ぶ』（3） 有斐閣 （1979）
- (7) 長崎 元広；「縄文集落研究の系譜と展望」『駿台史学』50 （1980）
- (8) 柴田 常恵；「石器時代住居址概説」『石器時代の住居址』 雄山閣 （1927）
- (9) 後藤 守一；「南多摩郡高ヶ坂石器時代遺跡」東京府史蹟名勝天然記念物調査報告5
（1927）
- (10) 関野 克；「埼玉県福岡村縄紋前期住居址と竪穴住居の系統に就いて」『人類学雑誌』
53-8 （1938）
- (11) 後藤 守一；「上古時代の住居」『人類学先史学講座』15・16・17 雄山閣 （1940）

- (12) 後藤 守一；「衣・食・住」『日本考古学講座』3 縄文時代 河出書房 (1956)
- (13) L.H.モルガン著・青山道夫訳『古代社会』 岩波書店 (1958)
- (14) 三森 定男；「先史時代の聚落」『人類学先史学講座』18 雄山閣 (1940)
- (15) 宮坂 英弼；『尖石』 茅野市教育委員会 (1957)
- (16) 宮坂 英弼；「八ヶ岳山麓与助尾根先史聚落の形成についての一考察」『考古学雑誌』
36-3・4 (1950)
- (17) 水野 正好；「縄文式文化期における集落構造と宗教構造」『日本考古学協会第29回総会発
表要旨』 (1950)
- (18) 水野 正好；「縄文時代集落研究への基礎的操作」『古代文化』21-3・4 (1969)
- (19) 禰津 正志；「原始日本の経済と社会」『歴史学研究』4-4・5 (1935)
- (20) 江見 忠功；「貝塚に就て」『人類学雑誌』30-2 (1915)
- (21) 和島 誠一；「原始聚落の構成」『日本歴史学講座』 学生書房 (1948)
- (22) 和島 誠一；「南堀貝塚と原始集落」『横浜市史』1 横浜市 (1958)
- (23) 麻生 優；「縄文時代後期の集落」『考古学研究』7-2 (1956)
- (24) 塚田 光；「縄文時代の共同体」『歴史教育』14-3 (1966)
- (25) 大林 太良；「縄文時代の社会組織」『季刊人類学』2-2 (1971)
- (26) 堀越 正行；「縄文時代の集落と共同組織」『駿台史学』31 (1972)
- (27) 堀越 正行；「姥山と今島田・その歴史的背景」『MUSEUM ちば』8 (1977)
- (28) 酒詰 伸男；「神奈川県下貝塚間交通問題試論」『人類学先史学講座』17 雄山閣 (1940)
- (29) 高橋 護；「縄文時代における集落分布について」『考古学研究』12-1 (1965)
- (30) 向坂 鋼二；「原始時代郷土の生活圏」『郷土史講座』1 朝倉書店 (1970)
- (31) 石井 寛；「縄文社会における集団移動と地域組織」『調査研究集録』2 港北ニュー
タウン埋蔵文化財調査団 (1977)
- (32) 後藤 和民；「社会と集落」『千葉市史 原始古代中世篇』 千葉市 (1974)
- (33) 後藤 和民；「縄文時代における東京湾沿岸の貝塚文化について」『房総地方史の研究』
雄山閣 (1973)
- (34) C.T.キリー 「セトルメント・アーケオロジー」『信濃』3-2 (1971)